玉

源氏倉開

一

帝國圖書館藏

龍田山霧白浪音高川うらうらの秋津の開
北戸行雲とゝもゝ海うゝ屋ゝとなる義ゝい
中一ゝ和寺の海より西ゝ海より海より海
西ゝの法ゝ家ゝくゝも住吉ゝ海ゝ真砂の
法ゝ西事ゝ言の葉ゝゝ言ゝ海ゝ
流ゝ西ゝ里ゝゝゝゝゝ徒のゝゝ
伊代ゝゝゝ西ゝ 抑源氏物語ゝ和歌の
第一ゝ西ゝ乃ゝ賞ゝ事ゝゝゝ
説佛法ゝ無量光佛ゝゝゝ西ゝ
光仏ゝゝ神道ゝ宗源ゝ二字ゝ

一

通ゝ法ゝ元豊ゝ人ゝ弁ゝ神ゝ
北者ゝ釋多ゝ
ゝゝゝゝゝ法ゝ廣
法ゝ池ゝ岩ゝ紫遠義ゝ大井
河ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
源氏小鏡ゝゝゝ
ゝゝ伊勢ゝ誠ゝ
ゝゝゝゝゝ

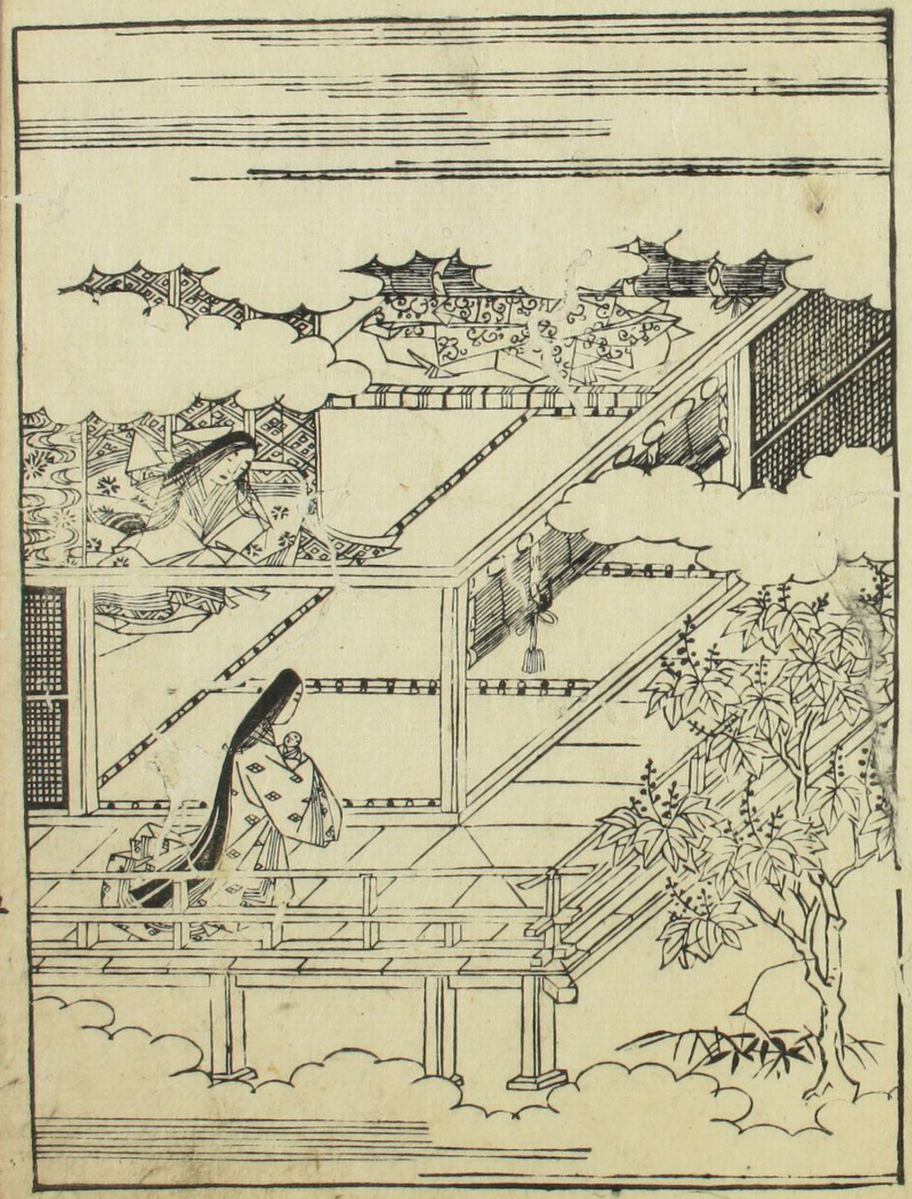
二

河原院の蛤貝の玉くらべの歌合の
くらべ歌に謝安の言の梟なれども海
の内よりいでしは小鏡とぞ詠めとうふ人
命おそみ毋形なんぞ源氏の鏡と名
付けるは益なき業の結句補ふ所の詩を
網羅す句作夏なとりて炉炭進めをよいらら
ん扇と奏むるの後事ちれとも共毋ら人
をしらしめんとて毋又誹諧の義句を加へる
とは行ふ義の海ちる紀世りいるをてりん
程形まつは時小鹿して佛の御法とうふ

行ふ句ふりと清秀行ふ物作者の次第なき
集と乃ち海沢の海を蛭を句れを
次第ふ毋ん毋ん程亦源氏の心に叶ふな
もあれと一句乃ちふ題号れおりもとち
毋行ふ事程あり毋ふ物ふ毋ふ毋
唯物ふ程ふ人洲作者人夢ふ毋許ふ事て
ふむ事とおりふ物ふ

光源氏の物語はひろく源氏の君の始終を記せるなり
源氏物語と云ふは君と光とをかたどりて桐壺の巻に七
歳の比年ゝの御学問の御小琴を弾給ひ
音ひくと雲井をひゝくの事も人毋はとるなり其
比高麗ゝの博士渡りて人相を相とるに毋は恐
ひ給ふ乃光顕を遣はして見給ふ
と云ふ事なり光と云ふは河海抄に曰
源姓始于淳和御子信公（マコト）私曰淳和天皇男女五十
人乃内のうち三十人許源氏姓を賜ふ也物と

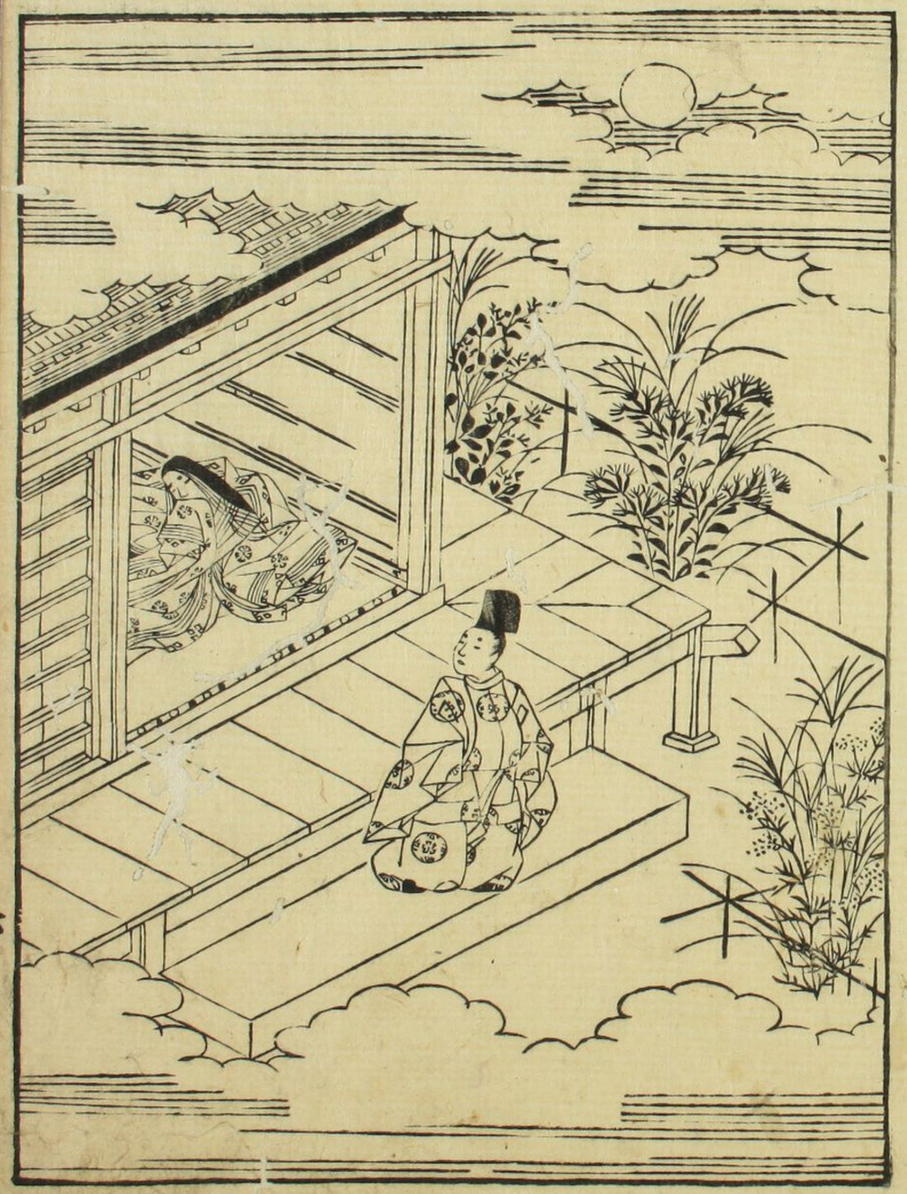
云ふ物と云義也語とは義理の理を演説する也
北野天満宮の字は姉法蓮華経の五字周易無とは
乾元亨利貞儒也とは仁義礼智信の五字なり
うゝ桑記二條院の后宮上東門院（藤原彰子）
紀双紙や作ると云ふ也紫式部は宮女也紫式部は
きて作るゝ也式部石山に籠りて此事を作り
析りと八月十五夜月明湖水に移りてんれを見る
きくに光源氏明石の浦を事を作るゝ也
帝王の奥義を今夜八月十五夜ありと云事
とうけつゝ式部を観音化身也と云ゝ



一 桐壺

桐壺と云事は大内ふるき御殿の名也此桐壺に
源氏の母君御をはしましける桐壺はなれたる
所也はしの間一つ人をのけられ給娘にて八の
宮八大納言にて失給へり人の子也御てうち名高き
御ゆゑ宮仕へ世間事の外時めき給
ふ比打つゞきて若宮出来給へば
源氏の君也

きりつぼ御ゆゝ海ゆゝ
松永氏貞徳居士

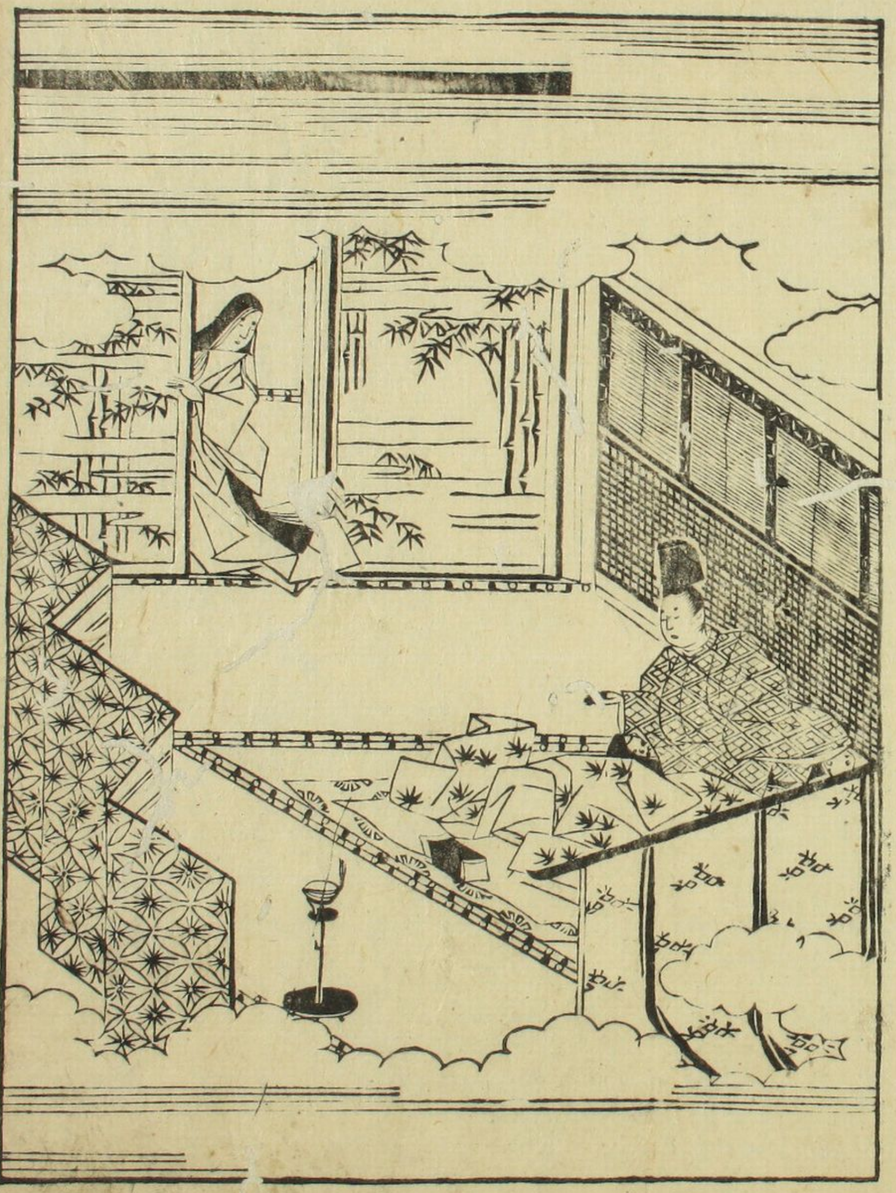


蓬木

奇妙なりけれど名とし御世はいとうらは里へ出
き給はんとき給ふよりてうる方をまづ家れ人伴
なの舟といひしが舟へ四ツ手をあてうつ(あわ)ちうぶふ
ひとりて源氏はいとれ女うつ悪ひ
給ひしくこうくれ給ふ思ひうけ給ふ女
数かへ舟を屋よ舟ものうさにわびふを
ちうてさ給ふ蓬木と詠へ給ふ

荒木田氏 守武

なくハのまこと思ひしぬや森れくき給ふ



空蟬　幕末のかゝひ

方角へ出れば見わたしいよく遠くなびけるのみゞ田舎
もとうり作り物はかりを植へ出ては行てかゝる女こそ
実に知て見べきわざなれ　おうまを出流ぞれ　絹糸
て蟬のもぬけをみるやうなる也　海苔ひて其あるこれをみあり
　　蟬の乃者とうて行る末乃なに野人ぐれ乃
う歳乃ふ　そ世業を空蟬といふ也空
蟬は夫居ぬるもてらせ世ふれあ海といふ

雞冠井氏　今徳

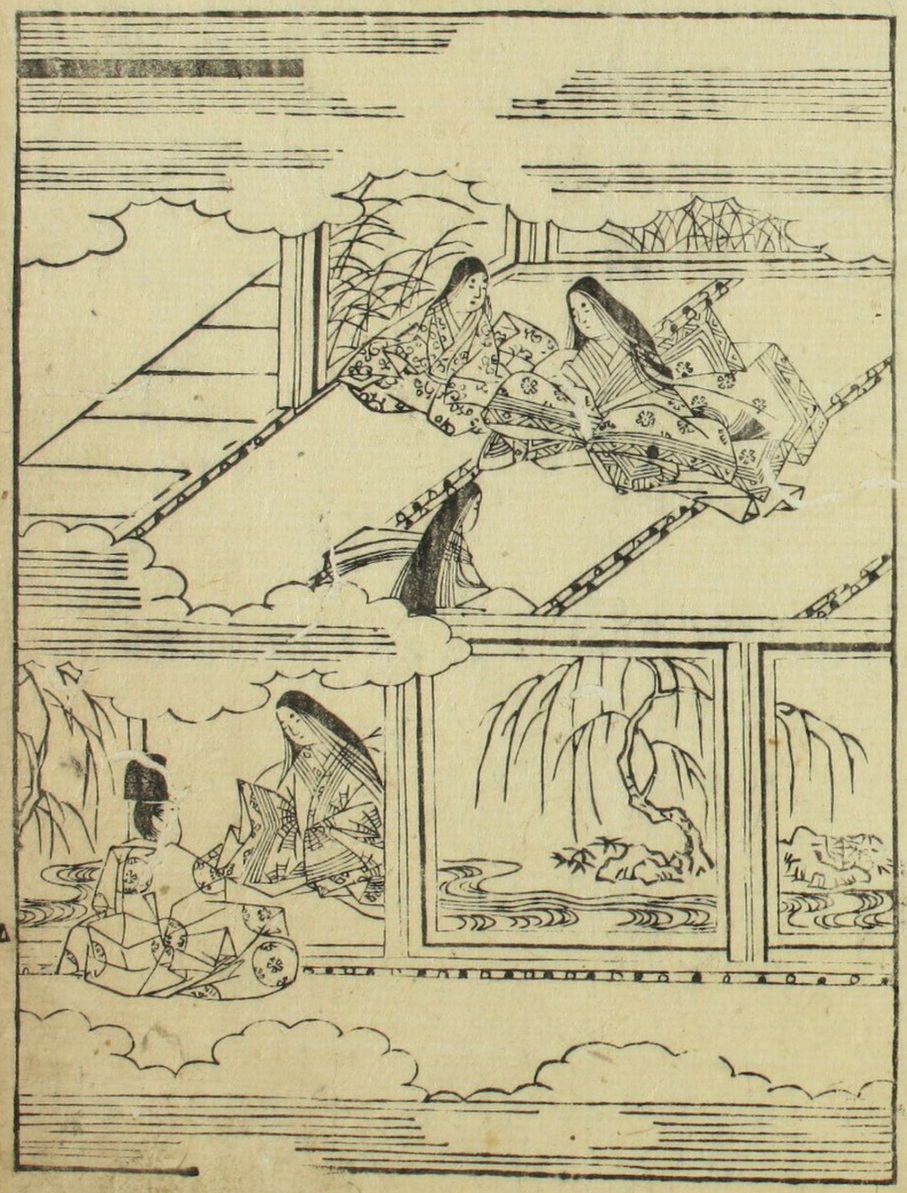
浪のうちぞぬぐ空蟬乃居う人皆

夕貞人　　菊末れなるし

六條院の息所の御方のわかんとあるて
とゝまるべきよう源氏思ひもかけぬ御事なる所よ夕顔
れたゝく咲うるもとうなる小家あり君何の花とと
こゝの野辺の方に問ふ白き扇をとりて白き扇をと
まゝ世をれて
とゝまるべきとゝもとゝめたうゝ猶に
れくこうるゝ夕顔とゝもの名なる

荒木田氏從五位上武孫

夕顔やあうゝれけるれ御ん



三　若紫

紫の上おさなかりし頃

あこがれていはけなき人無きむかしの

祈よりひけ面影人に似ぬ者と源氏九郎

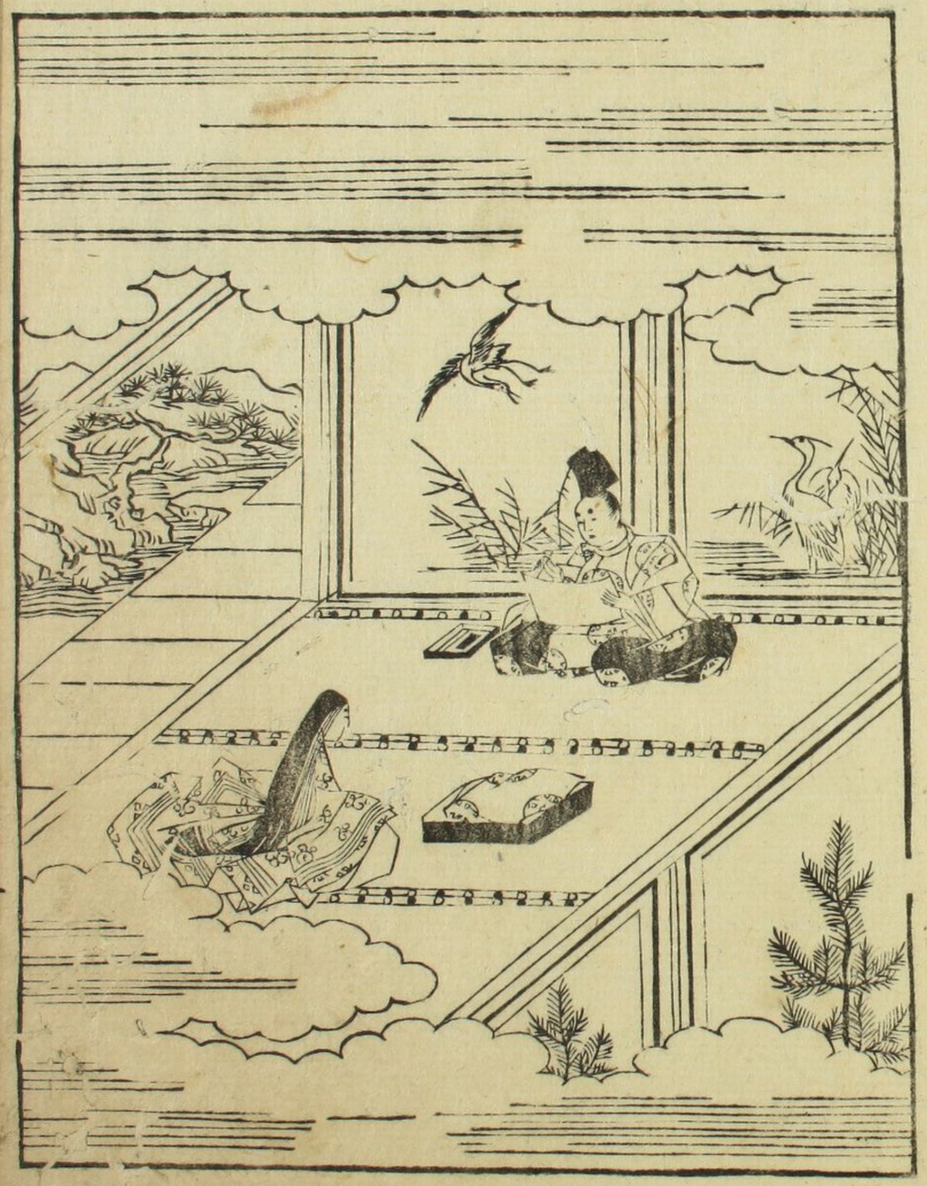
みたまひしに故なし

越前本勝寺上人日能

おもかげ

わすれむしかねぬれ

とりまぜ絵



末摘花

ひくらしのちるせはひとしほとし姫ぎみ一人おりのふいは
かたちうつくしけれど右大将源氏いとねんごろにて夜ゐ
まうでしたまひのみよりうつくしくて美白くうるはしき
赤くて鼻ばかりとりわけて悪しくおぼえたり
なにはのうらにはふるれば末摘むとそてに梅
きをうんと積のひ世紀の美人あるべきぬくまを摘て
と詠ぜ世ばなよ末摘花といふ

大阪林氏息女長

夏の間に末ぬしもをろ志ぬみうれ

紅葉賀

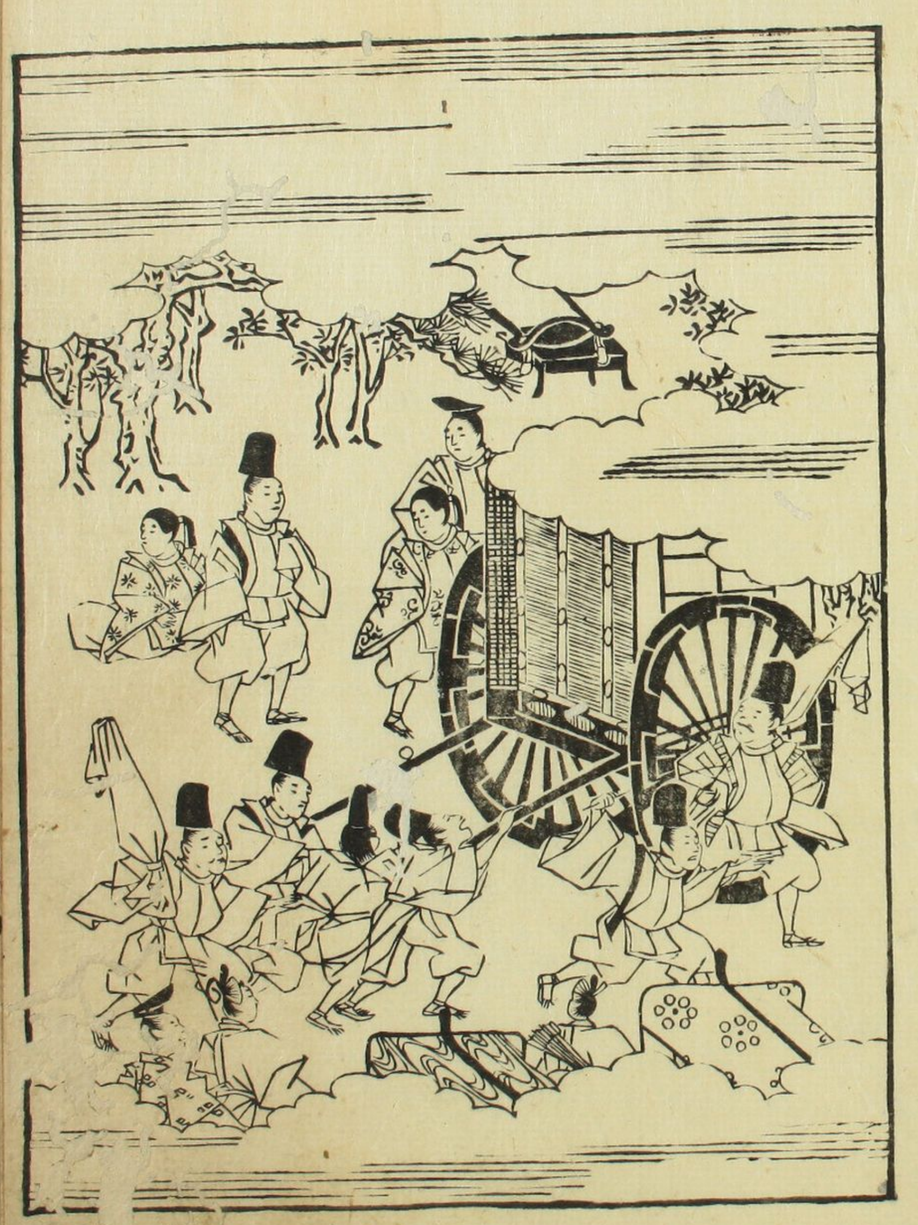
桐壺帝の院の賀をとゝのへ給ふ十月
月ちりおもしろきをりにて御賀の日紅葉
の賀といふ紅葉の下にて伶人の宮達も舞
給ふ其さま〳〵源氏の青海波を舞給ふ
ふぶくハ形

馬渕氏宗晩

あちらこちら風や
紅葉の賀の舞

花宴

はな紅葉乃賀へ(ハ)ゝ作義のゝ(ら)ゝ(ら)れ春ハ(ハ)ゝ(ら)ゝ(ら)ん
き蘭殿の梅乃ゝ(ら)に花の年丹て(れ)遊ゝ(ら)り各
影と移ゝ(ら)りて待ゝ(ら)んと他ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)
紅葉の賀ゝ(ら)れ葉と梅ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)
桜移ゝ(ら)ゝ(ハ)源氏殿ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)ゝ(ら)

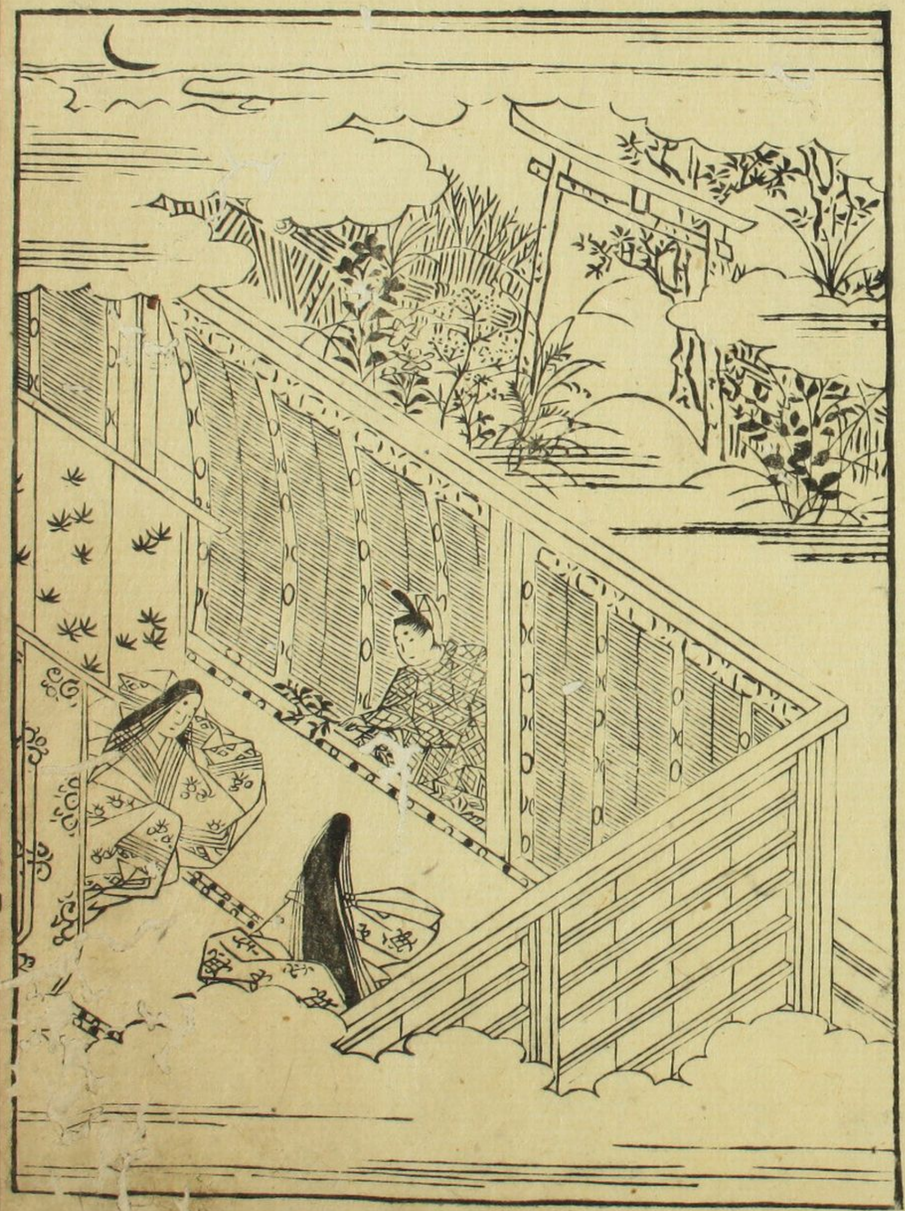


葵

朱雀院乃一の御子なる姫宮賀茂の斎の宮に
かりの御ものいみ其さうしの事にて人と同
じくさゝやかなるを葵乃上ハ心ぶかくさみゆとて御物忌
なりけるを小又六条の御息所ハ世ハ出給ふ御
車ハ立ぬとて人をやりてうしろめたの車ハ後ろ
なんしるとせし也車あまたひとつなりしをわ
賀茂の祭ハ事なれと葵乃車とていふ

牡丹花未慶友

ゆふかけてしめ葵ハ神のまもりぞ



七賢木

六条院より伊勢へ下り給ふ女院
[illegible]
[illegible]
[illegible]

八花散里

源氏中川乃河のほとりへ忍ひ給ふ夏の夕くれ
山ほとゝきす聞まほしく思ひ給ふ事とりあつめ
給ひしにつけてもわ
橘乃香をなつかしみほとゝきす
なにをかたちのよすがとはせん
石河氏鄙哉

よもやまの人丸みを画　里

厂や花　うつる

九須磨

朱雀院御位の時もの宴に招ひ給へり
おほろ月夜の内侍の君の事帝の
御心を時めかせ給ふ源氏なり
まゝと宮人ゝ給へる内侍母大きゝ腹ゝ
高砂なる海よりひるて須磨へ源氏とも
招ち給へる海とも

江戸住徳元

ちがるもの
須磨の手ゝ